Hokuriku University

北陸大学　紀要
第11号（1987）
pp. 241～259

島田清次郎未定稿翻刻 Ⅵ

The Reprinting of Unfinished Manuscripts by Seijiro Shimada Ⅵ

Teruya Kobayashi

小林輝冶*

Received November 2, 1987

清次郎の「保養院」時代の草稿は、その二十編が同じ形式のノートに書かれている（昭58・2「昭和文学研究」第六集参照）

①帰朝して　②縁　③煙　④将軍　⑤不二子　⑥偉大な中学生　⑦自刃　⑧松風　⑨変な弁護士　⑩「基督抹殺論」　⑪金剛舞台　⑫草枕　⑬明智中佐　⑭高原にて　⑮Nightingale　⑯流行者　⑰釣魚　⑱第一人者　⑲羅典区の少女　⑳牛

ところが「金剛舞台」までは縦書き、「草枕」以下では横書きである。しかも「草枕」以外のすべてには、自己採点と思われるはっきりした評価の記入があり、この二グループは、成立を異にする二群かと考えられる。

したがって「縁」には、大正十四年五月十日に書かれたとの記載があり、これは「保養院」への収容が大正十三年七月であった事を考えれば、前者は大正十四年から五年（昭和元年）頃、後者はそれ以降に書かれたかと思われる。

今回は、この後者から二編を選び翻刻、そこに出てくる問題を考えてみたい。

*教養部
Faculty of General Education

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

最初の一編「明智中佐」は、表題の肩に、「可　60点」とあり、何とか作品になるという自己採点のなされているものである。内容的には、かつて上海に遊んだ主人公野島の、その時の回想を書いたということになっているが、どうも龍之介の随筆「上海游記」（大正10・8－9）にかなり触発されたと思われる節がある。

しかしとくに問題になるのは、女性についての、彼が書きたかったその隠された謎の部分についてであろう。ここでは、誰にもそれと分かる形で著名な堺利彦の娘真柄への自分の失恋が告白され、同時に若い女のために、妻を捨て遠く上海にまで逃れねばならなかった明智、一軍人を登場させて、どうにもその存在の否定しがたい女性というものに肉迫しようとしている。したがって、明智中佐に呟かせている「女は生殖器のお化けだ。おせんべいだ」ということばは、いかにも悲惨な結論、モノローグである。世俗との縁を全く絶たれた院内にあって、なおも自分を苦しめてやまない女性について、その無意識裡の復讐が、こうも汚ない暴言となって現われたものか。それだけに北一輝にも触れ、往年の日々を語るところはあわれである。

草稿「草原にて」も、表題の肩に「可　50点」とあり、自己採点は「明治中佐」よりも低い。たしかに、構成から表記・語法のすべての細部において、その完成度は「明智中佐」よりも下である。一人の作家として、院中にあってもなお失われないその「目」をもっていたというべきか。

内容も、信州の高原で、主人公の作家桐原が、彼を師と仰ぐ青年松平義克に会い、その別荘に赴いてかくあるべき帝王道を説く、というだけの筋である。しかし、シェークスピア（ただし清次郎は「シエクスピア」と表記。）の「ハムレット」に始まり、引用は「歎異抄」の悪人正機、ヴェルレーヌからサンガー夫人にいたるまで、まことに多彩である。

終わりに、翻刻の際、留意した諸点について述べておく。

①　漢字・かなづかい（ただし「ルビ」については除く）等の明らかな誤りについては、その横に「ママ」をつける。ただし、あとで漢字を入れるべく（半ば書きかけたものも含め）、先にルビを付したものなどについては□を、さらにノートに破損・汚れ等があり、きわめて判読の困難なものについては、その字数相当分を「×」で示すことにした。

②　また、明らかに文字等の脱落と見られるものについては〔　〕をもって補い、逆に、補正等により消し忘れたと見られるものについては、その部分を＜　＞で囲むことにした。

③　また、漢字のうち現在施行されている「常用漢字表」にあるものについては、すべてその字体によって統一した。

明智中佐（あけちちゅうさ）。（小　説）

嶋田清次郎。

一、

仏蘭西祖界の高台の大谷光瑞師[1]のルネッサンス式の邸宅をお訪ねしたが、同師はあいにく大乗会の用件とかで東京へゆかれて留守だったので、彼[2]はその日の予定をかへて、馬車を一品亭（いっぴんてい）へ軼[3]しらせた。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

十一月末の霜枯れ時で、路端の空地には葉の落ちつくした櫨の樹が枯れたやうに、日のさゝない、鈍い灰色の空へそゝり立ってゐた。

ロンシャンの競馬場のやうに、あのブールニエの森林の美しさをもたないが、楊子江河岸につらなる大平原の一部であることを想はす広大な、涯のない競馬場のわきを馬車は鈍い緩漫な蹄の音をさせてはしった。一品亭の白あの[4]広大な洋館は、岱しゃ色の[5]、原野のやうな競馬場の前方にみえた。すでに秋の競馬 Season の終ったあとの競馬場はたゞ寂寞として、泥濘の乾いたあとの地面には空しい蹄のわだちのあとがのこっていた。彼れは巴里でよくその道の玄人に少額の Frank を委託して思ひがけぬ小遣ひにありついて面喰ったことなどを思ひ出した。〝今年の競馬の模様はどうだったい。〟と彼れは禦者にたづねてみたが、要領を得なかった。Hotel も×××ば、Resturant もあり、外国人の口に合ふ支那料理も調へると宿の東和洋行のあるじにきいていた。

〝どうぞこちらへお通り下さい。〟ともどかし気な日本語で一人の支那人の Boy が彼れを、二階の、洋室へとほした。開けはなされたぶえらんだから、涯しのない茫々たる大平原の競馬場が展開されてゐた。

〝お泊まりになるのでございますか。〟〝いや、私は東和洋行に泊っているので。〟〝東和洋行。支那人は何か彼れの気嫌をとるにふさわしい記臆をよびさますやうに考へこんだが、〝金玉均の殺された部屋を御らんになりましたか。〟〝うん、見た、何か金の筆蹟の額のやうなものがかけてあった。〟〝大人、あなたは英語をお話しになりますか。〟〝うん、少しばかり話す〟と彼れは English で応えた。そして、彼れと支那人の Boy との会話は英語で、極め（容易に）×された。支那人は電気ストーヴを彼れの足下に設置して、もう少し時期が早ければ、盛大だった秋の競馬に間に合ったらうにと遺憾がった。

二、

料理はひどく洋食化されたもので彼れの口には合はなかった。詩人の芥川龍之助君が半年ばかり上海にとどまっていた上海游記を、巴里の日本倶楽部で散見してゐた彼れは、上海に林黛玉といふ清朝末期の政治史をいろどる名妓のいることを知ってゐた。〝林黛玉は座敷へ出てくれますか〟と彼れは Boy にきいてみた。〝林黛玉はもう年を老って大へん醜くい。それよりも若い美しい妓をお呼びしましょう。〟と、支那人は伝票に、彼れにかはって〝□〟などいふ名前を書いた。彼れはそれでも万一を慮って、Boy のすゝめる支那酒をしりぞけて持ちあはせの Whisky でがまんし乍ら、蕭条とした十一月末の人も馬も影さへ見えない大競馬場の秋色を賞でゝゐた。

間もなく、ほんの子供子供した、十五六の瘠せぎすの黄色い貧血かと思はれるやうな、〝□〟と、顔色のほんのりと血色の秀でた豊頬の、花の咲いたやうに美しい濃艶な十六七の〝□〟とがあらはれた。後ろで分けた髪をふくよかな左右の耳房の上に束ねて、可愛らしい真珠と金剛石をちりばめた純金の環をそのふくよかな耳房に下げていた。こばると×模様びろうど地の上着、ゆるやかなずぼん、ダリア色の厚い毛糸の襟巻きで、あくまで豊かでほのかな肉の

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

香の漂ふ襟りくびをかくしていた（ママ）、□、は、彼れの傍へ椅子をすすめて、そっと仄かな膝を彼れの洋服の膝にすりよせて、ほんのりと微笑えむのだった。〝先生は、こちらのHotelに泊っていらっしゃるの〟と、〝□〟は彼れに分りやすいやうに、あどけない北京語でたづねた。

〝うむ、〟彼れはそれには答へずに盃を彼女に与へた。〝幾つなの、〟

〝あたし、あたしはたった十六よ〟彼れはよちよちはしていない（ママ）が、躔足（ママ）[14]の彼女を膝の上へ抱きかゝへようかと考へたが、我慢して、電気ストーヴの端で、彼れの靴先きと彼女の纏足とが触れる秘やかな戯れにひたっていた（ママ）。彼れは、ここの一室に洋妾を擁して何十万両の大バクチをうつ支那の大官や、美しい夫人とともに、盃をあげるであらう、青年ヤンキイやジョンブル[15]の豪胆と偉大な体躯（ママ）を想像してみた。何か片言のやうなことを言ってまつはりつく〝□〟のふくよかなからだと軽ろいきものの触感が彼れに軽ろい性欲をよびさまさうとした。

彼れは南洋にゴム林を経営し門下の子弟を膝下に養成する一個の偉丈夫の光瑞師[16]に面接できなかった遺憾をくりかへして、同師が本願寺を退かれる時30万円（ママ）[17]を要求された心事を、その時分可成り軽蔑していたもの（ママ）だが、仏祖界内の邸宅をみた彼れには光瑞師の大志が気づかれぬではなかった。そして、同師が独身でいられることを想起して、ふと、今のSexのpassionをはじずにいられなかった（ママ）。

〝君達は胡弓と三味線とをひくのでないか。〟彼れは井上紅梅[18]の遊記を思い出してたづねた（ママ）。

〝胡弓をひいてもよくって？　あたし、先生がうるさがって顔をおしかめになるかと思ってわざと楽器はとりよせないの。〟

〝□〟さんうちへお連れしたらどお？（ママ）〟と黄色い瘠せぎすの妓が、この第一流のホテルの一品亭を、ひそやかな旗亭と間違へてゐる彼れの始末に困ったやうに〝□〟（ママ）[19]へいった。

――ふと、彼れは黒いChopsbuyをおいて膝をたゝいた。彼れが光瑞師を訪ねた帰途、訪ねようと考へてゐた彼れの旧るい宗教上の友達の明智中佐を招ねいて、この寂びしい競馬場の風景と、このふくよかな南方支那の美妓の眺望を共にしたいと考へついたのであった。彼れは電鈴を押してBoyを呼んで、同じ仏蘭西祖界に愛人とともに間借りをしてゐるといふ明智中佐のAdress（ママ）[20]を知らして、馬車を出迎へにやるやうに命じた。

三、

中佐が上海へ髪を切った愛人を男装させてのがれたといふ噂は彼れが祖国を出発前にきいていた（ママ）。〝どうしてあの善良な奥さんと別れたのだらう。〟と彼れは、明智が未だ、大柄な極くあたりまへの奥さんらしい夫人と早稲田雑司ケ谷に一戸をかまへていた（ママ）時分のことを思ひかへしてみた。その時分彼れは日本社会党の首領の飯坂[21]の娘に失恋して、その懊悩を抱いてわづかに、同郷先進の徒によってなぐさめられていた（ママ）。彼れは早稲田の運動場で、早大時アメリカ巨人軍との第二回戦をみた帰途、明智をその家にたづねた。その日は日の輝やいた汗の出る春の日だった。彼れは座敷の床の間にすわって何かleaflet[23]らしいものの原稿を書いている（ママ）明智に、〝女は多

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

いのだ。今日の早大のベース・ボールの仕合をみていて、女学生や令嬢共の多いのをみて少し安心した。〟と彼れの恋の傷手も少しうすらいだのを告げた。そして、彼れも一日も早く一戸を構へなくては不便で、彼れ自身を群集から防ぐことさへできないのを嘆いた。〝畳一畳あればすわっていられるぢやないか。〟と明智は渋い顔をしてからかふやうに呟やいて、それでも床の間を下りて、日あたりのいゝ縁先きへ出た。

〝どうだったの、栄子さんに代るだけの女でもみつかったのか。〟

そういふわけでもないが――〟〝相変らず野島式を発揮しているぢやないか。と明智はびんづめのScotch whiskyを彼れにすゝめた。〝近頃はいったいどうしているの。早まってはいけないよ。――実際女は多いのだから、人類の半分は女なんだから。うっかり死んだりしてはいけないよ。〟しばらく何かを歎ずるやうに鶯色の深い瞳で空間をみつめてゐた明智は誰れにいふともなく、〝女は生殖器のお化けだ。おせんべいだ。〟と呟くのだった。

その夜、彼れは明智とつれだって、一度本郷の自分の下宿へもどった。〝何をよんでいる。えらいものを読んでいる。しかしかぶれてはいけないよ、〟と明智は北輝次郎[25]の、純正社会主義と国体論〟[26]をとりあげてみたりした。そして彼れの机のひき出しの中にねじこんである幾枚かの待合の堪定書を発見して、自分の昔年をふり省みるやうに、〝これをやっていては、野島君、どれ丈け金があったって足りるものでない。〟と微笑えむのだった。――その夜、彼れは明智につれられて、明智の旧友だといふ海軍大佐を神田の下宿にたづねた。

相場に失敗したばかりだといふ太田海軍大佐は狭い四畳半の床の間といはず、押入れといはずいっぱいに家財道具を積みこんだ中に莨をふかして、その未だ男ざかりの巨身にみなぎる精力と覇気をもてあつかっているやうに見えた。〝今時の青年は心得ちがいをしてをる。先達てもわしがお前は何になるつもりかと訪ねたら、大統領になるといってをった。〟大佐は言った。

〝野島君だ、有名な！――何か奢れ。〟と明智は旧友にあふうれしさに枯れ寂びた肉心に燃える情焔を仄見えさせておだてた。

その夜、彼れはこの二人の海軍将校から〝腹一杯〟洋食を奢られたやうに覚えてゐる。――明智がどういふわけで、あの善良な奥さんと別れて、彼れには、出来そこないのやうにしか考へられない若い女と上海へはしったのか、わけが分らなかった。

四、

蕭条たる平原の人気のない大競馬場に、日がしっとりと暮れ悩むで茫乎たる晩秋の夕霧が立ちこめてきた。彼れは二時間あまりも待ったが、とうどう明智は顔をみせなかった。

Boyは渡したまゝの名□[28]をもどして、大人、〝この方は暗殺されたといふ噂のある畏ろしい日本人です、〟と眉をひそめた。

〝先生、あたしの家へ遊びにきていたゞけないの〟とむずかるやうにすがり〝□〟に、明日また聘ぶからと、なだめて、〝□〟のやわらかな腕を、彼れの右に腕を感じ乍ら、待ちうけてゐる自動車にのって、白あのHotelの前に立って見送る彼女にその日のAdieue![29]

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

を告げた。

彼れは日本人倶楽部でひらかれる基督教青年会主催の講演会場へ自動車をはしらせたのであった。

〝僕達の合宿所のやうな広い西洋館ががら空き同様になってゐます。僕達といっしょに起居される苦痛さへ忍ばれるなら、僕等は喜んで貴君を歓迎します。このまゝ上海に止まってゆかれてはどうでせう。船の切符は、支那内地へ振り替えるなり、払ひもどすなり、いくらも御便宜はとりはからへます〟と、彼れが中学時代の同窓だった一人が、東亜同文書院を卒業して〝立派な郵船社員〟に立身していて、講演を終えて、Saloon(ママ)で上海民間の人々にとりまかれている彼れに久濶の情を叙べて、彼れにすゝめた。

〝いや、今度ゆっくり、南北支那を視察にくる機会もありますから。〟とことはり乍ら、同じ同文書院に学びながら、ある夜学校のぶえらんだから落ちて死んだといふ金子君に就いてあらためて、弔辞をのべずにいられなかった。〝金子君も君の崇拝者の一人だったよ〟と人なつこい性質の志摩はなつかし気にわらった。

翌日、船が上海の郵船波止場を発つとき、志摩は花束をもって彼れを見送りに来た。

〝東亜同文書院の諸君によろしく。そのうちきっときます。その時はまた御世話になると思ひます。〟と彼れは志摩に甲板の上で別れた。

それから二年半の歳月が経ってしまった。

彼れは、未だに南北支那へ旅行するといった自分の口約を実現できずにゐる、自己の無力におどろかずにいられない。

〝明智中佐ですか。あの方は少しかわってゐます。金持ちだときいているのに、いつも私共の船の三等で長崎へ往復していられるやうです。〟と志摩の語ったことを、明智中佐を思ふごとに、思ひ出すのである。

（をはり）

注

(1) 大谷光瑞（明治九―昭和二三／一八七六―一九四八）。浄土真宗本願寺派第二十二世。歌人九条武子の兄。神戸六甲山中腹の別邸に住み教団の近代化を進めたが、三回に及ぶ西域探険隊をはじめとする教団事業の膨大な出費等により、大正三年（一九一四）、本願寺住職・管長の職を退く。

(2) しかし大正八年（一九一九）には、新たに光寿会を興し、機関誌「大乗」の刊行を始めている。ここは、その会議に出席したことを指す。

(3) 「軼」は「逸」に同じ。したがって、ここは「走る」に代えて用いたものであろう。

(4) 「白堊」とあるべきところ。

(5) ここは「代赭色」とあるべきところ。

(6) Franc（フラン）の誤記。

(7) 「御者」の誤記。

(8) Restaurant（レストラン）の誤記。

(9) ベランダ。清次郎は外来語表記を平がなで書くことが多い。

(10) 金玉均（Kim Ok-kyoon／一八五一―九四）。朝鮮の近代化に尽くした李朝末期の改革政治家。朝鮮独立党の首領。一八八四年（明17）には、祖国の独立を計って「甲申の変」を企てたが成らず、日本に亡命。一八九四年（明27）、上海において暗殺された。

(11) 勿論ここは「芥川龍之介」の誤記。

(12) 「上海游記」（大10・8―9「大阪毎日新聞」）。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

(13) 先の「上海游記」によれば、次のように記されている。「彼女は私の想像よりも、余程娼婦の型に近い、まるまると肥つた女である。顔も今では格段に、美しい器量とは思はれない。頬紅や黛を粧つてゐても、往年の麗色を思はせるのは、細い眼の中に漂つた、さすがにあでやかな光だけである。しかし彼女の年令を思ふと、――これが行年五十八歳とは、どう考へても謊のやうな気がする。」

(14) 「纏足」の誤記。

(15) John Bull――イギリス人のあだ名。

(16) 光瑞は、本願寺を退いてのち、「光寿会」を興すまで、中国・南洋・トルコなどへ渡り、農園を経営している。

(17) 「先年大谷光瑞氏が坊さんを止めるについて三十万丈ほしいと云はれたことを新聞でみて、自分はある友人と、実際三十万円なら自分もほしいと話し合つた。大資本家の立場から三十万円位は小使銭であらうが、今三十万円あれば実にいゝ。／第一に十万円でタヾの学校を立てて、勉強したくてうづ〳〵しながら金がなくて出来ない人に勉強をしてもらはう、自分もする。／第二に次の十万円で自分一人の新聞社を経営しよう、どんな新聞かは云ふ必要がない、あと十万円は流動資本である。大資本家の立場から何んでもない三十万円でも自分でも自分はそれを百千倍に費ふ丈の自信はある。今ももつてゐる。少くとも邸宅をこしらへるよりはよいと信ずる。」（大9・9『早春』）参照。

(18) 井上紅梅（生没年不詳）。戦前長く中国に住み、中国民衆の生活風習を広く紹介して、名声を博した。昭和十九年（一九四四）前後に上海で没したらしいがはっきりしない。その時、六十代半ばであったといわれる。次の「遊記」とあるのは、大正九年（一九二〇）に刊行された『支那風俗』（全3）に依ったものか。

(19) Chopsuey（チャプスイ）の誤記。肉・野菜を混ぜた米国風中国料理。

(20) Address（アドレス）の誤記。

(21) 社会主義者「堺利彦」（明治三―昭和八／一八七〇―一九三三）を指していることは、まず間違いない。「地上」第一部が世に出た時、清次郎が堺にだけ一冊献呈したという話は、あまりにも有名である。

(22) 近藤真柄（明治三六―昭和五八／一九〇三―一九八三）。堺利彦の娘で、その生涯を婦人解放運動のために尽くす。夫は、大杉栄氏と共に無政府主義運動を続けていた近藤憲二（明治二八―昭和四四／一八九五―一九六九）。この真柄に対する一方的な清次郎の恋のいきさつについては、杉森久英「天才と狂人の間」（昭35・11―36・7「自由」）に詳しい。

(23) リーフレット。

(24) ここは、「お粗末な」「軽薄な」の意味で使ったものか。

(25) 国家主義者「北一輝」（明治一六―昭和一一／一八八三―一九三六）の本名。清次郎の一輝に寄せる関心の深さが考えられる。

(26) 正しくは「国体論及び純正社会主義」（明39）。

(27) 「もてあましてゐる」とあるべきところ。

(28) 「刺」の字形を忘れたものであろう。

(29) Adieu（アデュー）の誤記。

(30) Salon（サロン）の誤記。

高原にて。（小説）

嶋田清次郎。

'There are more things in heaven and earth, than are dreamed in your philosophy.'（ホレーショ）[1]

一、

シエクスピア、シエクスピアとよく人は口にするけれど、シエクスピアの作物をほんとうに（ママ）読んでゐるものは果して何人ゐるだら

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

う。〝上田からのりあはせたその頃外遊から帰ったばかりの松井は〝ロミオとジュリエットやツルゲネーフの「ハムレットとドンキホーテ」論に就いて、しきりに桐原へ話しかけた。憂欝なる哲人で現実家のハムレットと、快活なセルヴァンテスのドンキホーテに関する評論は西欧主義者ツルゲネーフの議論として、桐原は黙して傾聴していたが、余りに大劇作家シェクスピアをかついで一切の現実を否定する態度にあきたらなくなって、彼れは、〝我がドンキホーテよ、いかにも貴君の言ふ通りだが、この天地には君の哲学で夢みられるよりも、もっと多くのものがあるから、〟と答へた。そして、松井の素人英文学論を中止させて、松井が一千万円のWool会社を設立するといふ彼れらしき計画に耳を傾けた。〝なに長野市ではほんの市街の教育会の諸君に例年の通り招かれて歎異鈔[2]の一部を講義してきた丈けだ。〟桐原は松井の背を叩いていつも「景気のいゝ」松井を〝好い男〟だと思ふのだった。〝善人尚もて往生す、ことに況んや悪人をや、[3]をまた説いていられるのですか。私はもうそういふ面倒臭い乞食坊主の世迷はせ言の、お世辞には迷ひません。善人は善人なるが故に往生す、悪人は悪人なるが故に往生せず、の側です。もし往生を単に死ぬといふことに解釈するならば、善人は善人なるが故に極楽に往生す、悪人は悪人なるが故に地獄に罰せら〈ら〉れるゝといふ信念の側です。――昨日も上田市の別所へ近へ高原に別荘地が二十万坪ばかり経営され、得だといふので、自分の別荘も一軒たてるつもりで、ほゞ予約してきました。ハッハ、桐原さん、全く貧乏暇なしとはこの事です。〟〝貧乏暇あって困っているのだよ、〟と桐原は寂びしくわらった。

桐原は長野で使ってもいゝ大してあてにもしていなかった講演〔を〕した講演料謝儀をもってゐた。〝田口で下りて、赤倉温泉へ寄ってゆかないか。〟桐原は大して予期もしなかったが、汽車が田口駅近くへ来た時、たづねてみた。〝実はこれから越後へ出て油田をみてゆきますから、今度またごゆっくり、御招待しませう。東京の住居ですか、未だ帰ったばかりで、日曜といふのにこの始末です。家も未だ借家で、赤坂の参謀本部の裏にゐます。〟〝参謀本部って、どこかあの寺内さん[4]の銅像のある近所か、〟〝伊藤美代治[5]伯の向ひの広い邸宅です。もう少し落ちついたら清沢満之師[6]の追悼会の形式でも御一同を御まねきしませう。〟さういって彼れは桐原へ東京からもってきた贈物の余ったのだがとことはって□を贈るのだった。桐原は、わりに殊勝な松井の態度に涙ぐましくなって、〝いつも行き届いた申分のない男だな。〟と彼れの肩を叩いて軽ろく笑ふのだった。桐原は松井に別れて、古びた山間の小駅におりて、赤倉通ひの自動車を待った。七月初旬の薄暮のことだった。

二、

馬車で高原の村へかへる人々もあったが、桐原は赤倉通ひの自動車に乗って妙高山麓のそこの温泉への路をいそいだ。二三人の信濃あたりから療養に出かけたらしい人々が同車してゐた。道路は急に阪道で、青々と茂った葭や蘆の沼地の間をのぼっていた。時折り曲折する村落の垣根の間から、色づいた杏やすもゝや柿の熟れた樹枝[7]が、自動車の蓋ひにすれずれに伸びてゐた。桐原は別れてきた長野

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

の人々や、元気のよい松井などのことを考へてうつむき加減になってゐた。そして、汽車の中でひらいよみした長野の市街で購った「田中正造翁」[8]のことを考へるともなく考へた。〝あの時分は実に愉快だった。みなと一緒に渡良瀬川畔の村であの正造さんのために演説したときには、ひとりでに熱い涙が流れたものだった。不思議なものだ〟。桐原は脊せ細った自分の膝をさすってみた。

葭や蘆の茂った薄暮の高原の急な阪道を自動車はのぼってゆく。その墨絵のやうな葭蘆の間々に、薄紫や、黄や紅ひの高山植物が、「作られたものの如く」ちりばめられてゐる。

〝あなたは、どちらへお泊りでございますか〟。同車してゐる老人がたづねた。〝私は赤倉の□旅館へ泊るつもりです〟。道づれの嫌ひな桐原はうるさゝうにこたへたが、ふと顔をあげると、薄曇った無辺際の薄墨色の大空へ、くっきりと妙高の霊峰が、透白明徴な白雪の頂き、氷雪をいたゞいた紫紺色に暮れる雄大華麗な霊妙な姿、山麗の青い松杉の森林を、何の障礙[9]もなしに、全身的にあらはしてゐた。七月初旬の薄暮の高原の風が、蘆や薄をそよがせた。桐原は自動車の窓の硝子を押し下げて、この偉大なる自然の荘厳に驚異の眼をみはらずにゐられなかった。やはり来てよかった、と彼れは二十代の青年のやうに一夜の旅を迷った自分を悲しむやうに、哀れむやうに、謙遜な心になって、幾何学的な傾斜の断面をもって、切りそいだやうに、一ちめん蘆秋[10]のそよぐ大平面を平面のまゝに、薄暮の大空の下の紺青一色の日本海へなだれ落しに落してゐる妙高山麓の高原と日本海と空を拝むのだった。

駅から一里あるかなしの赤倉の温泉場へついたのは、明るい七月の宵晴に、冷めたいほどの涼風が膚にこたへるやうだった[11]。

老人は家族の先着してゐるらしい倶楽部の前で下りてしまった。自動車は彼れを□旅館の前へ止めて、部屋をたづねたが、正月の頃から予約してあった人々が家族をつれて来て〔を〕られるので、空間は一つもないといふ返事だった。〝それなら帰らう〟。桐原は少し寂しい気持になったが、この高原の荘厳な風景と身膚にこたへる涼風にあった丈けでもこと足りたやうに思って、このまゝ帰らうとあきらめた。石ころの多い山道や、左側の長屋のやうに貧しげな旅人の宿を一眼みた丈けで、彼れは強ひて泊る気になれなかった。

自動車は彼れ一人をのせて、急激な阪道をすべるやうに駆けをりた。人に圧迫を感じ易い桐原は、一人になった安楽さで、眼下に展開する高原の菅や葭の傾斜面、そのはての紺青一色の日本海の海面を飽かず眺めた。うしろを振りかへりみると温泉の一部に夜の灯がついて、彼れに何とも云へぬ口惜しい仲間はづれになったやうな寂しさで彼れの胸を傷つけた。〝この辺でガソリンを注ぎます〟。と運転手は断って、自動車をとゞめて、道傍のガソリン・タンクのポンプをあげた。

何かよく高山植物の薫りが漂ってゐる薄闇だった。桐原は扉を排して路上へ下り立った。そこは四五本の喬木の茂った高地で、丘のふもとを細い水が流れてゐた。水辺の沼地のほとりには蘆が生ひ茂って、コスモスや萩が夕風にそよいで咲き乱れてゐた。〝未だ汽車は7時間〈間〉[12]にあひます。高田へおとまりですか。客が込んでいない時は、高田からお淋みしい分には、芸妓を呼ぶこともできます〟。運転手は鳥打帽のつばをあげて、川べりに佇む彼れへ寄った。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

薄の白い穂先きに青い光りが明滅するのを彼れは発見した。〝あれは何んだ〟、桐原は運転手にたづねた。〝蛍です〟

蛍が出る時には、余りに冷えびえとした高原の冷気だった。蛍のゆくえをたづねてゐる彼れの瞳に、咲きみだれた萩や薄や蘆の茂みの間に立つ、一人の青年と未だほんの女学校を出たか出ぬ程度の少女とを見出した。仕立ておろしの布地白絣をきて、錦紗濃黄地の兵子帯をしめて、コスモスや萩の花束を手にした、立った青年の姿がどこか見覚えがあった。二人はこちらへ歩んでくるらしかった。青年のうしろの漆黒の髪の毛を耳かくしにした少女は、めりんすの秋草模様の単衣の下に、胸脊(ママ)せた、ほっそりと伸びられる丈け伸びた、ふくよかな処女の肉身を秘してゐた。その胸高かにしめたメリンス[13]の帯は、未だ全体に漲る稚けなさを、未だ表はれざる××の存在を、しっかりと彼女の全身から守ってゐた。

〝わたしもう歩けないわ〟〝何あに、歩けなかったら、兄さんが負っていってやらあ〟、運動家らしいひきしまった凛然たる声がひびいた。

少女は、白いはんけちに蛍を包んでゐた。

三、

〝桐原先生ではありませんか〟、自動車道へ出て、道傍の桐原を高原の藩暮にすかしみてゐた青年は手をあげて、思ひがけぬ回邂(めぐり)遇の喜悦の声をあげた。〝松平です。お覚えがありませんか〟

桐原は、そこの薄闇に、かつて彼れが東京に彼れの会合をもってゐた時分、青年の父に招かれていった、そして、ひとり住居の彼れの家へ蠟扇会の会合毎に訪ねてきた侯爵家の令嗣の松平義克を見出した。寂しい孤独にとざされかけた桐原の胸へその声は、同じ青年の情熱と歓喜をもってひゞいた。〝今、赤倉の旅館へきて、満員だといふので断はられてしまった。田舎へ引込んでゐると、避暑の時節さへ忘れてしまってゐる。自分乍らあきれてしまった。ハハハ〟、特別な女性論[14]の体現者である桐原は、三十幾年の〝未結婚生活〟の故に、二十代の青年のごとくわらうことができた。

〝義妹の瑠璃子です〟、松平は彼れの背後にそっと身をかくして、とつぜん、この高原の薄闇でめぐりあった兄の師を見守ってゐた。

〝危ないぢゃないか〟、桐原は四辺をみまわして、人気のない荒涼たる夜に佇む高貴の子女の身辺を危ぶむだ。

〝兄さん、何にを言ってるのよ。桐原先生のお邸へなら、二年前に一度あなたと御一緒にお伺ひしたことがあってよ〟

〝何に、瑠璃子さんだって――〟、相原は思はず破顔して、松平の背を軽く叩いて、〝瑠璃さんなら私も知っているぢゃないか〟、と、愛する許嫁の処女との高原の散索に、二年ぶりで、「彼れ」に会った喜びで、少しぼおっと上気した松平の心持を思ひやらずにいられなかった。〝今年は父が郷里へ帰省してゐますので、母と一緒に僕達がこちらへ来ているのです〟、松平は苦笑して相原の身辺を顧みて、〝私のところへ来て下さい。旅館のやうに行き届きますまいが、御ひまがあったら御滞在下さい〟

〝桐原先生、しばらくでございました〟、と瑠璃子は彼れの前へほっそりした上半身を折って挨拶を述べた。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

歩いてゆこうといふ松平の久しぶりであった桐原師への甘えを瑠璃子はさえぎって、〝あたし、とてもこれ以上歩けないから〟と、とうどう三人とも自動車にのって妙高山麓の松平侯の別荘へもどった。〝先生、今夜は僕達二人と母のために、特に蠟扇会をひらいて下さい。僕達の結婚もこの十月に迫ってゐるのです〟。松平は露にぬれた草花の一束を桐原に分けもたして、快活に、変りのない彼れ自身の生活を何くれとなく慈父に甘えるやうに物語るのだった。

四、

松平侯の別荘は、赤倉温泉の全景を見下ろす、丘陵の上に、老松大杉の深沈たる冷気の上に、そびえてゐた。その夜は月のいゝ夜で、白銀のやうな月光は、明るい七月の空、背後の妙高の霊峰、一望そぎ切ったやうな大高原の傾斜面のはてとほく、煙るやうな海原の上に照っていた。松平侯の老夫人は、義克や瑠璃子とともに、自身桐原のためにもてなした。

床の間には、特に清沢満之師自身〝光明遍照十方世界〟の一軸がかけてあった。桐原は持参の薄い墨染の衣を、布地白絣の単衣の上につけて、心ばかりの清めの香を□[15]いた。そして、亡き哲人清沢師の「我が信念」の一節をよんで、いつものユーモアを含んだ語調で、厳粛な清沢師の秋霜烈日たる信念を、彼れの愛する侯爵夫人や近き将来の義克夫妻のために説くのだった。彼れは、清沢師の自然主義は日本の文芸の自然主義と異なることから[16]、分りやすくはひって、人類は一度死ぬものであるかもしれぬ、地球は有限であり、人類自我の欲求は無限である。しかし、（今度は彼れが無意識に松井の引いたホレーショの言葉をひいた。）'But there are more things in heaven and earth than are dreamed in your philosophy.' 決して絶望してはならない。死ぬことは死なゝくとも、他人が殺さなくとも、自然が殺してくれる。死ねば死んだで、絶望せずに、殺された世界に、生れ出でて生命の一念を把握して往生してゆこう。〟といふ彼れのいつもの信念を述べた。

〝あなた方はこの世の俗衆の眼からみれば、この妙高の山のやうに高貴の位地にいられる。それは、あなた方にとっては時にはお寂びしいことであるに相違ない。時によれば、人生の半ばにして印度の王子釈迦のごとく中途にして、人生の平原へおどり出ようとする堕落の俗念にとらはれることがあるかもしれない。たとへば、最近の白蓮夫人[18]のごとき、また、あの武者小路子爵令息[19]のごとき、何れも不良青年の徒に身をまかしたり、不良少年の徒の首領となって得々としてゐるやうである。これらは、いはゞ人生をかりに有限なる地球面上全体に比較しても、何れも中途にして土にかへった×易行道の輩です。私は近き将来に未来の軽やかな侯爵夫妻である可き義克君と瑠璃子さんを前にして、お二人のゆく手に、どんな障礙があらうとも中途にして堕落することなく、孤立孤往の帝王道の実践者として、寂寞の誘惑に負けられないことをのぞまずにいられない。凛々たる孤風自ら渝らず、もし人生寂寞の念ひが苦しめたなら、その寂寞を医する帝王道迴向の大道は、経国済民の政治として、高貴の家の主人たる松平侯の前途に、展開されてゐる可きである。――永らへようか、ながらへまいか、といふ中世英吉利の王子ハムレット

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

の悩みを医したものは、実に父公のために、正義の大軍をおこすことよりほかに道はなかったのです。ヴェルレーヌやボードレルやワイルドなどの耽美主義は、これを夫妻国中の秘戦に限局すべきである。彼等一介の詩人の輩は、高貴の出の僥倖をあはよく獲得せられたる生れながらの優越者松平侯爵にとっては、単に一本の指先き、一片の肉片丈けの人生しか持ってゐない軽輩にすぎないものである。小さき一共産村を南九州の電燈すらつかない僻村にひらくよりも、国家枢要の権力を把握しえ、全国電化の大革命を断行するのが、高貴に生れたる男児の使命である。――かゝる男児に連れ添ふ女子は、その人生の最高峰の一つに立つ男性らしき夫に「面じても」厳粛なる道徳の実践者でなくてはならない。エロチックのあらん限りは、夫君ただ一人の国中の秘密の中に、余すところがあってはならない。夫君以外の男児は、瑠璃子さん、あなたにとっては、ことごとくデクの棒でなくてはならないのです。かの白蓮夫人のごときは、要するにその生涯を不良老年と不良青年のためにふみにじられた――高貴の出生にふさわしくなかったことを、わざわざ、この世で広告するために生れた、婬婦に過ぎない。換言すれば、あゝいふ種類の女は生殖器丈けなのです。馬やだと何のえらぶところもない。――高貴は高貴らしく、もし、男児生涯の志たる経国済民の大事を行ふに必要ならば、むしろ、これを平民階級の最高峰者に求めねばならない。そこに恐らくは、帝王者最後の一味の××××するほんとうの同情を得られるかもしれない。――〃

桐原はそういって二人の母の面前で、将来の松平夫妻のために祝福した。

〃義克は生来からだが弱くて困っているのでございます〃と老ひたる夫人は母らしく我子のために嘆いた。

〃御夫君が師としていられた清沢先生は十一貫何匁の脊せ細ったお方だった。しかし、今、生き存らへている沢柳なんどといふ諸君はみな、清沢師には一目おいていたものだった〃と桐原はわらって老ひた人を力づけた。〃御心配には及びません。義克君をいくつと思っていられる〃

五、

〃桐原先生、いつもの追分をきかして下さい。〃と義克は母が居間へしりぞいてから、彼れへ甘えた。

〃高い所にゐて、時々麓へ下りると、街の人々や農民や労働者の群れや、単に市井のゴロツキに過ぎない役者が恐ろしいものとして見えるものです。彼等が武装する間に、君は立って二十幾ケ師団の軍隊と幾百万噸の軍艦を動かし得る主権者のすぐ傍にゐるので〔は〕ないか。心配せずに、男らしく政治の大道に立って、権力を把握し使行するものの地位にふさはしい人格と識見を養はなくてはならない。――君が全力をつくして××××し能はぬ事功のためには、瑠璃子さんが、第二の君を享楽の報償として用意するのだ。サンガーなんといふアメリカの看護婦上りなどの説くごとき制限論は、君が廟堂に立った時、社会下層の輩の間に宣伝すべき一トリックに過ぎない。――無政府、不倫、悪逆の輩をば、よろしく銃剣をとって刺殺せしむ可きである。親鸞聖人の〃善人尚ほもて往生す、ことに況

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

んや悪人をや〟の〝悪人〟の意義をはっきりのみこめなくては切角の聖人の教えも水泡となりこの世の毒となってしまう。悪人とは感覚の一部のために全体命を代なしにしてもう×虫的、獣人の義ではなくて、人類進化の最高峰にひとり立つ真の人間の義に解する時に、はじめて正しく解釈されるのです。』

〝おどろかされてはゐけない〟と桐原は松平の肩を軽ろく叩いて、元気づけた。そして、一つ丈け錆びのある声で松前追分をうたってきかせた。

〜　道の草人にふまれて一度は枯れて、露の情けでよみがへる。

翌朝黎明に、桐原は松平義克自ら運転する自動車で、田口駅まで見送られた。コスモスや萩の一束を義克は車窓から彼れの師へ捧げた。

（をはり）

注

(1) 戯曲「ハムレット」第一幕第五場、父の亡霊とハムレットが語り合う、その時、居合わせたホレイショーに対して、ハムレットが呼びかけるせりふの一節である。したがって、（　）内の「ホレーショ」はハムレット、また引用された一文も、正しくは次のとおりである。

There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy.（傍線筆者）

坪内逍遙訳では「この天地の間にはな、所謂哲学の思も及ばぬ大事があるわい。」芥川比呂志の名演で知られる福田恒存訳では「ホレイショー、この天地のあひだには、哲学などの思ひも及ばぬことがたくさんあるのだ。」とある所である。

しかし、院中の何もない場所で、これだけ昔覚えたものを正確に思い起こすということは並大抵のことではない。しかも、この一文のもつ意味から推して、自分の境遇のあまりの重なりようを、そこに見ていることは明らかで、この記憶といい、構成といい、未定稿という欠陥はあるが、とても狂気の人の書いたものとは思えない。

(2) 「歎異抄」とあるのが普通である。

(3) 第三章冒頭の句。「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」（蓮如本系／講談社文庫版『歎異抄』）、「善人なほもつて往生を遂ぐ。況んや、悪人をや。」（永正本系／旺文社文庫版『歎異抄』）等、その語句には、多少の異同が写本によって見られる。

(4) ここは、軍閥政治との批判を受け、米騒動（大7）によって、その内閣を崩壊させた寺内正毅（嘉永七―大正八／一八五二―一九一九）を指した、と思われる。

(5) 正しくは伊東巳代治伯（安政四―昭和九／一八五七―一九三四）。伊藤博文にその才幹を認められ、明治から昭和にかけて政界の表にしばしば登場する官僚政治家。とにかくこの辺の事情についても清次郎はきわめて該博な知識をもっていたと思われる。

(6) 清沢満之（文久三―明治三六／一八六三―一九〇三）が、明治三十三年（一九〇〇）開いた浩々洞には、彼を師として、佐々木月樵・多田鼎、さらに清次郎に多大の感化を与えた暁烏敏らが集まり、雑誌「精神界」（明34）を発刊、その実践的精神主義の、思想界全般に与えた影響は少なくない。清次郎も勿論その一人であったと見做されよう。

(7) 杏・すもゝ・柿が、同時に熟れているというのは、ここはうっかり書いたものであろう。普通、杏は初夏、すもゝは真夏、柿は秋に実を結ぶ。

(8) 社会主義運動家でもあった作家木下尚江（明治二―昭和一二／一八六九―一九三七）が、大正十年（一九二一）に著したもの。田中正造（天保一二―大正二／一八四一―一九一三）は、足尾鉱毒事件の指導者としてあまりにも有名な政治家である。

(9) 「障礙」か「障碍」とあるべきところ。

(10) 書き急いで「萩の」の「クサカンムリ」を落したものであろう。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

(11) ここも「頃」とするか、あるいはこの一文の頭の「ついたのは」の「の」を「時」とすべきである。

(12) 横書きのノートに書いているため、つい、「7」としたものであろう。「時間」は「時、間」とある方が誤解がない。そのあとの「間」は重複である。

(13) ここも、表記の統一という視点からいえば「めりんす」とあるべきところ。

(14) たとえばこういうことを考えていったものか。「自分の妻たる第一の資格は、自分に命をくれても惜しいと思はないことだ。これが第一条件である。大抵の女はこうきいて逃げてしまうであらう。それでよいのである。」「一命をこの自分にやつてもいゝと思ふもののみ、この自分の妻たる資格があるのだ。結婚した翌日一命くれと言ふかも知れぬ。または、平和に、友白髪まで添ひとげるかもしれぬ。とにかくいつでもこの自分のために命をくれる女でないと自分の生涯の仕事をするために、安心が出来ぬ。こちらに命をくれる女には、こちらの命もあづけてをく。」（大9・9『早春』）

(15) 「焚」の字が、ここでは思い出せなかったものであろう。

(16) 清次郎に、次の一文がある。「醜いものは真ではない。自然主義者はこの意味に於てあやまつてゐる。彼等は『醜いものは真だ』と言ふ言葉を『醜いものも見える』と云ふ可きであつた。その醜いものは本質ではない。本質は醜い中にあっても、光つてゐる。／それが見えないのは眼がないのだ。」（『早春』）

(17) 「人類は」の肩に「〃」の脱落がある。

(18) 柳原白蓮（明治一八―昭和四二／一八八五―一九六七）。ここは、若き社会主義運動家宮崎龍介との恋愛を念頭に書かれたもので、あとの「不良青年の徒」とあるのは、明らかに「青年宮崎龍介」を指したものである。

(19) 勿論、白樺派の武者小路実篤を名指していることは明らかであろう。

(20) 実篤の九州で始めた「新しき村」建設運動（大7）を指す。

(21) Margaret Sanger（1883―1966）世界的なアメリカの産児制限論者。大正元年（一九一二）にその運動を始め、日本へも大正十一年（一九二二）以来しばしば来日している。

(22) きわめて舌足らずではあるが、ニーチェ的な「悪人」の新解釈である。

(23) 「江差追分」に同じ。ただし普通うたわれる「江差追分」に「道の草人にふまれて」の歌詞は見当らない。

NII-Electronic Library Service